

薬剤部 DI ニュース

医療安全管理について（シリーズ 4）

～ 薬剤によるアナフィラキシーショックについて ～

一般的に医療安全でアナフィラキシーショックと呼ばれるのは、「アナフィラキシー（原因薬物投与後数分以内に下記症状出現し、ショック状態となる、時間の単位で徐々に出現してくる場合もある）」と「アナフィラキシー様反応（I型アレルギー反応を介さずにアナフィラキシーと同様症状出現）」を意味します。これら症状の発症には、薬剤の投与量がほとんどのケースにおいて関係なく、少量の薬剤が体内に投与されただけでも、急激な症状が現れることがあります。

不安感、口唇のしびれ、悪心、嘔吐、腹痛、尿意などの初期症状
声門浮腫や気管支喘息による呼吸困難
高度の血圧低下、脈拍の触知不能
広範な皮膚の潮紅または蕁麻疹
発熱

特に問題になる全身症状を引き起こしやすい薬剤（注射剤）を以下にまとめました。

抗菌薬（ペニシリン系、セフェム系、モノバクタム系、カルバペネム系 等）
ヨード造影薬（ピリスコピンDIC、イソピスト、オムニパーク、ウログラフィン、リピオドールウルトラフルイド）
局所麻酔薬（キシロカイン、カルボカイン）
NSAIDs（ロピオン 等）
タンパク質含有注射（インシュリン、血液製剤、イントラリボス、アリプロスト、リプル、リツキサン、アバステン 等）
溶解補助剤を含有する注射剤（タキソール、エンドキサン、タキソテール 等）
その他、特に事例の多い薬剤（エルプラット 等）

アナフィラキシーショックは薬物有害反応であり、回避できないことが多くあります。したがって、アナフィラキシーショックを引き起こしやすい薬剤の投与時には、医療従事者が投与後の経過観察を十分行うだけでなく、患者自身に前駆症状を理解してもらい、異常を早期発見できる体制を整えることが重要です。



特にリスクの高い薬剤に関してはマニュアルが整備してありますので遵守をよろしくお願いします。